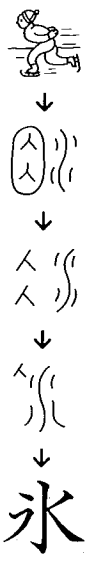


氷

三年

回数 5
筆順 一ノリ氷
オン ヒヨウ
フン こおり・ひ

成り立ち



もとの字は「氷」で、こおりの中に見られる「すじ」をあらわし、「こおり」のいみをあらわした「氷」と、「水」を組み合わせて作った字で、「氷」はそれをかんだんにした形です。
しかし、「氷」の「氷」は、「水」がこおってかたまつた「その」かたまりのしるしと見ることもできます。

使い方

▽夏になると、ぼくは、かき氷を食べます。氷いちごや、氷あずきが好きです。
▽氷雨というのは、冷たい雨のことです。また、ひょうやあられのことも氷雨といえます。こちらは、文字通り、氷になった雨です。

熟語例

▽氷山(海に浮かんでいる氷の山。氷河の一部分が海に落ちて、氷山になります。「氷山の一角」といえば、はっきりと外に表れた、ほんの一部のことをいいます。氷山は、ほんの一部しか海の上に出ていないからです。)
▽氷河(南極や北極にふりつもった雪が、かたまつて氷になり、重みで流れだした氷のこと。)
▽氷点(水が氷になる時の温度。また、氷がとけて水になるときの温度。「けさは、氷点下三度になって、池に氷がはった」などというふうに、つかいます。)
▽氷解(氷が解けるように、疑問などがすっきり解けること。「積年の疑問が氷解して、はればれとした気分になった」などというふうに、つかいます。)

表

三年

回数 8
筆順 ナ圭 表 表 表
オン ヒヨウ
フン おもて・あらわす

成り立ち



きもの形をあらわし、「きもの」のいみをあらわした「衣(年451)」という字の間に、「毛」という字を入れて作った字です。「毛がわのきもの、毛のはえている方」が「おもて」なので、「毛」と「衣」とで「おもて」といういみをあらわしました。(例表面、表紙。)

「おもてに出す」こと、↓「あらわす」といういみにつかわれます。(例表現、表情、発表。)

「おもてに立つ」といういみにつかわれます。(例代表。)
また、「文書の形式」の名前につかわれます。(例図表、年表、辞表、墓表。)

使い方

▽おおかさんがうちで、おともだちとお話があるというので、ぼくは表にあそびに行きました。
▽作文というのは、自分がしたことや、見たことや、心の中であんじたことを、文字に書き表すしごとです。作文の中には、書いた人の心が表れているものがあります。

熟語例

▽表面(おもて。ものの一ばんそとがわの面。「つくえの表面に、きずをつけてしまった」などと、つかいます。)
▽表紙(本の一ばんそとがわにつけてある紙。といっても紙ばかりでなくぬのやかわで作ってあるものもあります。)
▽表現(心の中でかんじたこと、思ったことを、表に現すこと。「ベートーベンの田園交響曲には、いなかへ行った時のかんじが、とてもよく表現されている」などというふうに、つかいます。)
▽表情(顔に表れた心のようす。「楽しそうな表情」などというふうに、つかいます。)
▽発表(意見などをほかの人に表し知らせること。「なにかいい考えがあれば発表して下さい」など)